和文典

1

福岡第一師範學校
（學校圖書）
登錄番號 第　號
語學門
日本語部
文法 欄　項
目　次
全　冊ノ内第　冊
分類番號 第 25752 815 號

第一巻

T1A3
11
0 93

図書　和図書　迴
a1380328960a
福岡教育大学蔵書

福岡縣尋常師範學校藏書

和文典下巻

大和田建樹　著

第三編　章格

詞をあつめて。主と従とを備へたるを章といひ。主従の不完全なるものを句といふ。この章句の用ひ方を教ふるを章格といふ。

章句の種類

章といふ主たる詞と從たる詞とを備ふるものをいひ。句といふ詞の集まりてまだ全き章を成さぬものをいふ。

章句ハ正句。倒句。挾句。轉句。略句の別あり。

正句　正句といふ主を前ハ置た從を後ハ置たるものをいふ。をかいち。

今ハむかし竹取の翁といふもの(主)ありけり。(從)

(竹取)

手のわろき人(主)の。はゞからず文かたちを(從)(主)いよ〳〵し。(從)見ぐるしとて人よかゝをる(主)いうるさし。(從)(つれ〴〵)

櫻ちるこの下風(主)いさむから(從)で空にぞられぬ雪(主)ぞふりける。(從)(拾遺)

倒句　倒句といふ後詞。副詞の下に受くる詞を前に置たかへたるをいふ。をかはち。

太刀をどうたてくあれどいとおもしろし。もろこしに敵にぐして遊びゐんなどきくに。(枕草紙)

何事ぞ。生昌がいみじうおちつるいと笑ハせ給ふ。(同)

心あらん人に見せばや津の國のなゝはわたりの春のけしきを。(後拾遺)

君が代ハ盡きじとぞ思ふ神風やみもすそ川のをまんかぎりハ。(同)

挾句　挾句とは直に續かぬ句を間に挾み入れたをるいふ。これに二つあり。その入れたる句の獨立をるものと。上の句をい離れたれど下の句をい續くものとなり。

母北の方なんいにしへの人のよしあるまて。「親うちぐしさしあたりて世のおぼえはなやかなる御かたがたまもおとらむ。」何事の儀式をもてなし給ひけれど。（源氏）

これは「よしあるにて何事の云々」をつゞく處なるを。「親うちぐし云々」の句を挾みて末は共まで。「何事の云々」の處までつゞけたるなり。

大柑子を「これ喉かわくらんたべよ」と三つ。いとかうばしきみちのくに紙ゆつゝみてとらせたりければ。（宇治）

これは「大柑子を三つ」と續くべきを「これ云々」を挾みて。末は「とらせたりけれむ」に續けたるなり。

肴ゆをなけれ「人はしづまりぬらん」さりぬべきものやあると。いづくまでも求め給へ。（つれ〴〵）

これは「人はしづまりぬらん」の句を挾みたり。意は續きたれど文法上には獨立せる句なり。

轉句　轉句とは從止言の詞を轉じて。下れ句に續けたるをいふ。

木幡おほとりにて。奈良法師れ兵士ゆまた具してゆ

ひたるゐ。この男たちむかひて。日くれゐたる山中ゐあやしきぞとまり候へといひて。太刀をひきぬきけ(リ)きば。人もミお太刀ぬき矢をげなどしけ(リ)るを。具覺坊手をもりて。うほし心なく醉ひたるもれこ候ふ。まげてゆるし給はちんといひけ(リ)れむ。おのおれ朝りてをぎぬ。(ほれ〳〵)

わづらはしかりける事は事ゐ(シ)くて。やをかるべき事を心ぐるし。(同)

略句 略句とは有るべき主從または後詞にて續くべき次ぎ句を略せるをいふ。これはいもでもそれと知らるる時ま限るべし。

ほれ〳〵ゐるまゝよ。日ぐらし硯に(ワガ)むかひて。心にうほりゆくよしなし言を。そこはかをぎおく(ワガ)書きほくれむ。(ほれ〳〵)

今いむかし。源博雅の朝臣といふ人ありけり。(ツノ博雅ハ)延喜の御子の兵部卿の親王と申す人の子ゐり。(今昔)

いまし〳〵への天皇い文章を好みてかくゐんおはしける。をなん(世人ノ)かたりつたへたるをや。(同)

よそゐのみあはれとぞ(ワガ)見し梅の花
あかぬ色香い折りてありけり。(古今)

けふ来をいあすい雪をぞ(花ノ)ふりなまし

きえをいねりとも花を見ましや。(同)

みどりなる一つ草とぞ春い(ワガ)見し

秋いいろ〳〵の花ぞ(ソノ草ハ)ねりける。(同)

これらい。主をを、でもそれと知らるゝ處なれば。いも

ぬが常なり。

かいねりい濃きを着る日い紅い中に。(着)紅を着る

日い濃きを中ま。(着ル)など例の事なり。(紫日記)

わが君い千代ぞ八千代ぞさゞれ石の

いはほとなりて苔のむすまで。(榮エマセ)(古今)

梅の花を折りて(タマヘ)と人のいひければ。(同)

あられふる交野の御野のかり衣

ぬれぬ宿かす人しなければ。(ワレハワビシ)(詞花)

こぞの春ちりまし花もさきまけり

あれ別のかゝらましかば。(ヨカラマン)(同)

これらい後詞の下を略したり。

重語

句中ぞ同じやうの音調をもつ詞の重なるをば。避けざるべからぞ。それい左の規則ぞよるべし。

其一　あらびたる動詞のかさなる時い。終の詞の外連用言を用ふ。

「我も行く人も行く」といふべきを
「我も行き人も行く」とし
「雨も聞け月をも見よ」といふべきを
「雨も聞き月をも見よ」とす。

其二　同じ助動詞を持つべき助動詞のかさなる時い。
怒の詞ふのみ助動詞を用ふ。
「歌もよみつ詩も作りつ」を
「歌もよみ(ツ)詩も作りつ」とし
「雨ふらん風ふかん」を
「雨ふ(ラン)り風ふかん」とす。

其三　形容詞のかさなる時い。前の形容詞を副詞の形ふして用ふ。
「高く尊き」を　「高く尊し」とし
「細し長し」を　「細く長し」とす。

係詞と結詞

力後詞または他の詞のため1。意の關係せる從詞の語尾の變いる事あり。此語尾を變へしむべき詞を係詞といひ。變へられたるものを結詞といふ。

係詞を第一。第二の二種1分つ。左の如し。

第一の係

- 力後詞
  - ぞ
  - なん
- 疑問詞
  - 代名詞
    - あゝ
    - たれ
    - いづれ　いづら
    - いづこ　いづく　いづち
  - 形容詞
    - いく
    - いかなる
  - 副詞
    - なぞ　など
    - いかゞ　いかゝ　いかで
    - いつ
  - 後詞
    - や
    - か

第二の係

力後詞——こそ

この係と。それに従ふ結とを用ふる規則に。左の如し。

其一　第一の係ある時に。結に連体言を用ふ。

其二　第二の係ある時に。結に既然言を用ふ。

其三　結に。すべて終止言に同じく切るゝ詞とある。されば切るゝ詞より受くる後詞。感詞も。共に従ふものと知るべし。

其四　倒句にて。結の。係より前にあるべきものに。之を用ひず。

其五　カ後詞の係は。互にかさね。又は疑問詞の係とかさねて用ふる事なし。

其六　疑問詞の係は。代名詞。形容詞。副詞のと。疑問後詞のとをかさねて用ふる時。上に置くにはやを用ひ。下に置くにはかを用ふ。

「人やたれなる」「何をかせん」の類なり。

其七　疑問詞の内。代名詞。形容詞。副詞の係の下にもを置く時は。疑問は意消えて結に関係せず。

「たれも知らじ」「いづこも同じ」は類なり。

其八　第一は係と。第二は係とかさねて用ふる事なし。

其九　体助動詞と感詞とは前には。係を用ふる事なし。

但しなしは詞のみは例外にて。終止言にも第一第二は結にも用ふるなり。

其十　係はみを用ひて結を略し。又は結を轉じて下に續くるは妨なし。下の例を見るべし。

今係結を表に示す事左の如し。

第二の係結	第一の係結	終止言の詞
こそ	疑問詞 なむ ぞ	○

四段	ら變	な變	上二段	下二段
行く	有り	往ぬ	起く	受く
勝つ	たり	死ぬ	落つ	兼ぬ
酌む	けり	ぬ	試む	消ゆ
行く	有る	往ぬる	起くる	受くる
勝つ	たる	死ぬる	落つる	兼ぬる
酌む	ける	ぬる	試むる	消ゆる
行け	有れ	往ぬれ	起くれ	受くれ
勝て	たれ	死ぬれ	落つれ	兼ぬれ
酌め	けれ	ぬれ	試むれ	消ゆれ

か變	さ變	一段	き活	しき活
く	を	着る	清し	久し
		似る	寒し	樂し
		見る	べし	ましし
くる	をる	着る	清き	久しき
		似る	寒き	樂しき
		見る	べき	ましき
くれ	をれ	着れ	清けれ	久しけれ
		似れ	寒けれ	樂しけれ
		見れ	べけれ	ましけれ

特状助動詞				
ぞ	ん	けん	き	らん
ぬ	ん	けん	し	らん
ね	め	けめ	しか	らめ

体助		
らし	らし	らし

左に例を示すべし。

其一　用言の例

佛の御教またがふらんと「ぞ思ふ」。(つれ〴〵)

四人ばかり「ぞ乗りて行く」。(枕草紙)

あさましきまであいなくおもて「ぞ赤む」や。(同)

こゝにまだわがあかぬ月を山の端の
をちの里には遅しと「や待つ」。(六帖)
すむ水を心なしとは「誰かいふ」

水「ぞ」冬のはじめをも知る」。（千載）

よろづの言の葉と「ぞ」なれりける」。（古今）

手ゑむすびて「ぞ」水も飲みける」。（つれ〴〵）

とりあつめたる事い秋の〻「ぞ」多かる」。（同）

院ゐいまゐる人もなき「ぞ」さびしげゐる」。（同）

海人の家の〻「ぞ」ある」。（十六夜）

父いおほ人ふて母「おん」藤原おりける」。（伊勢）

かへりていつらく「なんかしこき御心ざしを思ひ給へ侍る」。（源氏）

咲く花い千草ながらふあだなれど

「たれかい春を恨みはてたる」。（古今）

あをからい若菜つまんと片岡の

あしたの原いけふ「ぞ」焼くめる」。（拾遺）

春霞たつを見をて〻行く雁い

はな〻き里にをみ「やならへる」。（古今）

秋きぬと目にはさやかに見えねども

風の音に「ぞ」おどろかれぬる」。（古今）

山おろしふ鹿の音たかく聞ゆなり

尾上の月にさよ「やふけぬる」。（新古今）

山ゑぐり時雨「やをぐる」まつ風の

ふくかときけば軒の玉水。（千五百番）

時の間の烟ともおりおんと「ぞ」うち見るより思いる

る」。（つれ〴〵）

おほ梅のにほひに「ぞ」いにしへの事も。たちかへり戀しう思ひいでらるゝ」。（同）

かゝる人「こそ」世においしましけれ」とおどろかれけるまで「ぞ」まもりまねらをる」。（枕草紙）

山藍もて摺れる衣のあうひもの

なゞく「ぞ」われゐ神ゐ仕ふる」。（新勅）

秋風ゐさそはれわたる雁がねい

雲ゐ吹むるゐゐけふ「ぞ」聞ゆる」。（後撰）

七夕ゐいま「や」別るゝ」あまの川

うはぎり立ちて千鳥なくなり。（新古今）

みてぐらのたつや五十鈴の川波ゐ

山のもとぢもぬさ「や」たむくる」。（拾遺愚草）

都ゐい「たれ」をゐ君い思ひいづる」

みやこの人い君をこふえり。（後拾遺）

夕やみい道もみえねど古郷い

もとこし駒ゐまかせて「ぞ」くる」。（後撰）

白妙の波路わけて「や」春いくる」

かぜふくまゝゐ花も咲きけり。（新勅撰）

明けゆく空のけしき炎のふゐかはりたりとい見えねど。ひさかへめづらしきこゝち「ぞ」する」。（つれ〴〵）

霞たつ春の山べいとほけれど

ふきくる風い花の香「ぞする」。(古今)
思ひやるさかひはるかゝなり「やする」
まどふ夢路ふあふ人のなき。(同)
人ゑれず春を「こそ待て」はらふべき
ひとゑた宿ゝふれるゑら雪。(拾遺)
折りつれむ袖「こそにほへ」梅の花
ありと「やこゝゝゝ鶯のなく」。(古今)
この世ふうまれてい願はしかるべき事「こそ多かん
ゑれ」。(つれ〳〵)
和歌「こそゑほをかしきものゑれ」。(同)
雪ふりて年のくれぬる時に「こそ
つひふもみぢぬ松も見えけれ」。(古今)
あだなりと名ふ「こそたてれ」櫻花
年ふまれゑる人もまちけり。(同)
大かたの秋くるからゝ我身「こそ
哀したものゝと思ひしりぬれ」。(同)
櫻「こそ思ひしらをれ」さゑ匂ふ
花も紅葉もつねゑらぬ世を。(源氏)
心をばわがこゝろ「こそゑぐさむれ」
あらましごとのそはをがたりふ。(續古今)
色よりも香「ゑそあはれとおもほゆれ」
たが袖ふれし宿の梅ぞも。(古今)

いづくゝもあれしむし旅立ちたる「こそ」目さむる心地すれ」。（つれ〴〵）

其二　形容言の例

世をむさぼらざらん「ぞ」いみじかるべき」。（つれ〴〵）

けふにかりてい俄に誰「かよむべた」。（今昔）

をかしき事「ぞ」たぐひなき」や。（枕草紙）

かくむかりをしを思ふ夜をいたぶらに

ねてあかすらん人さへ「ぞうた」。（古今）

女郎花ふきをぎてくる秋風い

めふは見えねど香「こそしるけれ」。（同）

みづからいえ「なん思ひたつまじき」。（源氏）

あふごともふるき世のみ「ぞしたはしき」。（つれ〴〵）

ふみの詞などの「ぞ」昔のほうぼどもいいみじき」。（同）

花のちるこを「やわびしき」。春がすみ

立田の山のうぐひすの聲。（古今）

かぐ屋「こそおまめかしく面白けれ」。（つれ〴〵）

岩まくだけて清くながるゝ水のけしき「こそ」。時をも

わかずめでたけれ」。（同）

ものゝあはれもさらずなりゆく「こそあさましけれ」。

（同）

霜いとさろうおけるあした。やりをづより煙のたつ

「こそをかしけれ」。（同）

其三　特殊助動詞の例

よろしき深さふてだふ。さるはかおき物ふのりて漕ぎゐく物ふ「ぞあらぬ」や。（枕草紙）

その始めを思へばかゝるべく「なんあらぬ」。（古今）

夏草ゐまげりふけれど郭公

「など我宿ふ一聲もせぬ」。（新古今）

春の夜のやみいあやなし梅の花

色「こそ見えね」香やいかくるゝ。（古今）

梅ゐどのなりたるをりもさやうふ「ぞありし」。（枕草紙）

神代よりいく世「かへふし」少女子が

袖ふる山のみづがきの松。（家隆）

郭公みねの雲に「やまじりにし」

ありそいきけど見るよしもおし。（古今）

かげゐにも見えぞなりゆく山の井い

淺きよりまた水「や絶えにし」。（後撰）

をりにふれば「おゝかいなゐれなちざらん」。（つれづれ）

うごきなきいはほのはても君「ぞ見ん」

少女の袖のおでつくすまで。（拾遺）

たちちめいかゝれそてしもうば玉の

わが黒髮をおでぞ「やありけん」。（後拾遺）

後徳大寺ゐも「いかなる故か待りけん」。（つま〳〵）
齋宮の野の宮におはしますありさま「こそ。やそし
くおもしろきことその限とはおぼえしか」。（同）
山かくす春のかをみぞうらめしき
「いづれ都のさかひなるらん」。（古今）
袖ひちてむすびし水のこほれるを
春たつゐふの風「やとくらん」。（同）
今様のさとゞものめづらしきをいひひろめもてなす
「こそ又うけられね」。（つれ〳〵）
このたびの御かへり事を知らずなりゐし「こそ口を
しかりしか」。（枕草紙）

きのふ「こそ早苗とりしか」いつのまゐ
稲葉そよぎて秋風のふく。（古今）
夕月夜おぼつかなきを玉くしげ
ふたみの浦に明けて「こそ見め」。（同）
から衣たつを惜しみし心「こそ
ふたむら山の関となりけめ」。（後撰）
逢坂のめしひ今宵「こそ流泉啄木にひくらめ」。（今
昔）
大原やをしほの山もけふ「こそ」
神代のことも思ひ出づらめ」。（古今）

其四　体助動詞の例

この川よもみちば流る奥山の
ゐきげの水「ぞ」今まさるらし」。（古今）
天の川うきつのなみよひこぎしの
つまむかへ舟今「や」こぐらし」。（新勅撰）
ぬきみだる人「こそ」あるらし」玉の
まなくもちるか袖のせばきよ。（古今）
霜のたて露のぬぎ「こそ」よわからし」
山のよしきの織ればかつ散る。（同）

結詞を略せる例い左の如し。

何事も珍しき事を求め異説を好むい。淺才の人の必

あることあり「ぞ」。（聞キシ）（つれ〳〵）
今いわきまへ知れる人あしと「ぞ」。（聞ノ）（同）
徳のいたりける「や」。（アラン）（同）
孝部王の記ふ侍ると「かや」。（承ル）（同）
子孫あらせじと思ふありと侍りけると「かや」。（承ル）
（同）
ひかる君といふ名い。こまうどのめできこえてつけ
奉りけるとぞ。いひつたへたると「おん」。（聞キ傳フル）
（源氏）
うたてありける「こそ」。（アリケレ）（枕草紙）
深く信をいたしぬればかゝる徳もありける「こそ」。

（アラメ）（つれ〴〵）

時代やちがひ侍らん。おぞつかなく「こそ」。（侍レ）といひければ。（同）

結を轉じたる例は左の如し。

雪かと「ぞよそこ見つれ」ど梅の花をりてい似たる色あかりけり。（玉葉）

中よくて「あんたはぶれければ」。かくいふ事ありとて。（今昔）

わか宮は云々まゐり給はん事をのみ「なん」。おぞしいそぐめれば。（源氏）

同じ心ならん人としめやかまものがたりして。云々いひなぐさまん「こそ」。うれしがるべき」。さる人ありまじけれむ。（つれ〴〵）

いふしへは車もたげよ火かゝげよと「こそ」いひし」を。今やうの人はもてあげよかきあげよといふ。（同）

霞「こそ」たちかくせども春の夜の月をぞ人はみるべかりける。（續後拾遺）

ちりつもる花「こそ」岩ほよどむとも香はながれてや瀬ふかをるらん。（散木）

結詞の變格　第一の係おきに第一の結を用ひて。終止言とをる事なり。これは「あり」「よ」「かな」などの詞を略し

たる心にて用ふべし。すなはち。

いかむかりおぞしめしけんを覺え待りし」。（大鏡）

世々ふをもわれ忘れめや櫻花

筈のたもとに散りてかゝりし」。（後拾遺）

さゝ波や比良の高嶺の山おろしふ

もみぢを海のものとなしつる」。（千載）

やかたをのましゐの鷹をひきすゑて

うだのとどちを狩りくらしつる」。（同）

あひふあひて物思ふ頃のわが袖ふ

やどる月さへぬるゝ顔なる」。（古今）

きよし野の山の白雪ふみわけて

入りふし人の音づれもせぬ」。（同）

何とおく草の花さく野べの春

くもゐ雲雀の聲ものどけき」。（風雅）

冬の来て山もあらいふ木の葉ふり

のこる松さへ峰ふさびしき」。（新古今）

問題

一　章句の種類をあげよ。

二　重語の種類をあげよ。

三　第一の係詞第二の係詞をあげよ。

四　第一の係詞ゐいかなる結詞を用ふべきぞ。

五　第二の係詞ゐはいかなる結詞を用ふべきぞ。

六　左の例の正しきゐは係、結のまるしをつけ。正しからぬをば直すべし。

世い定めあきこそいみじけれ。

おほ梅の匂ひゐぞ。ゆゐしへのことも立ちかへりこむしう思ひいでらる。

くちをしとぞ古き人におほせられき。

かゝるをりゐぞ人の心もあらはれぬべき。

御前ゐきこしめして。ゆみじくまくとぞ思ひつらんとぞ。のた

まはする。

いとかしこしとなん思ひ給ふる。

四人ばかりぞのりてゆく。

ゆくりなくあくがれいでしいさよひの
月やおくれぬかたみなるべき。

からの歌ふもあくぞあるべき。

風のみおそ人に心いつくめれ。

うちかへし見まくぞほしきふるさとの
大和なでしこ色やかはれる。

誰しかもとめて折りつる春がすみ
たちかくすらん山の櫻を。

白波のこゆらん末のまつやまに
はおとや見ゆる春の夜の月。

東にてすむ處に月影のやつとぞゆふなを。

たゞ此かへりごとばかりぞきこゆ。

神なびれ山をすぎゆく秋なれば
たつ田川ゐぞぬさにたむけつ。

散りぬれば戀ふれどしるしなき物を
けふおそ櫻をちむをりてん。

をしむまし花のちらずにけふもたゞ
春ゆくとおそよそに見ましか。

立田川もみぢみだれておがるめれ
まゐらば錦おかやたえなん。

夏にこそさきかゝりけり藤の花
まつまとのみぞ思ひけるかな。

なつ衣きていく日にやなりぬらん

のこれる花にけふもちりつゝ。
むすぶ手に扇の風もさすられて
瓏の清水をゞしかりけれ。

第四編　歌格

音の數と章句のならべ方に定まりある文を歌といふ。歌の規則を敎ふるを歌格といふ。

歌の種類

字數と章句のならべ方とによりて分類する事左の如し。

短歌　長歌　旋頭歌　今樣　歌曲

短歌　短歌は五音。(一の句とも初句ともいふ)七音。五音。七

音。七音と連ねて。三十一音あるを常とす。之を二つに切りて五。七。五を上の句。またい本の句といひ。七。七を下の句とも。末の句ともいふ。但し句のきり方に種々あり。

五。七」五。七。七」と二の句ゆてきるゝあり。

心あらん(五)人ゆ見せばや」(七)津れ國れ(五)

おゆいわたりれ(七)春れけしきを。(七)(後拾遺)

よそゆれみ(五)あはれとぞ見し」(七)梅れ花(五)

あかぬ色香い(七)をりてありけり。(七)(古今)

春霞(五)たなびきゆけり」(七)ひさかたれ(五)

月れかつらも(七)花や咲くらん。(七)(後撰)

都人(五)さてもをらをん」(七)蛙なく(五)

あがたれ井戸れ(七)山吹れはあ。(七)(同)

五。七。五」。七。七と三れ句ゆてきるゝあり。

世れ中ゆ(五)さらぬ別れの(七)おくもがあ」(五)

千代をとい弦る(七)人の子れため(七)(古今)

さ夜ふくる(五)まゝゆ汀や(七)こほるらん」(五)

とほざかりゆく(七)しがの浦おみ。(七)(後拾遺)

こえはてむ(五)都もとほく(七)おりぬべし」(五)

關の夕風(七)しむしをゞまん。(七)(同)

五。七。五。七」。七と四の句ゆてきるゝあり。

都をむ(五)かすみと共ゆ(七)立ちしかど(五)

秋風ぞ吹く」(七)白川のせき(七)(後拾遺)

風吹けむ(五)蓮のうてばゐ(七)玉こえて(五)
をゞしくかりぬ」(七)ひぐらしのこゑ。(七)(金葉)
松風の(五)音だゐ秋い(七)さびしたゑ(五)
衣うつなり」(七)玉川のさと。(七)(千載)
五」。七。五。七。七と一の句ゐてきるゝあり。
またや見ん」(五)交野のみのゝ(七)櫻がり(五)
花のゆきちる(七)春のあけぞの。(七)(新古今)
いかゐせん」(五)こぬよあまたの(七)時鳥(五)
待たしと思へば(七)村雨のそら。(七)(同)
あすもこん」(五)野ぢの玉川(七)萩こえて(五)
色かるかみま(七)月やどるかり。(七)(千載)

五。七。五。七。七。」と五の句ゐてきるゝあり。
わたつみの(五)濱のまさごを(七)かぞへつゝ(五)
君がちとせの(七)ありかをません」。(七)(古今)
たらちねの(五)親のまもりと(七)あひそふる(五)
心ばかりは(七)せきかとゞめそ」。(七)(同)
女郎花(五)はかのさかりゐ(七)秋風の(五)
吹く夕ぐれを(七)たれゐかたらん」。(七)(後撰)
一句のうちの半ゐてきるゝもあり。
うつりゆく(五)雲ゐ嵐の(七)聲すなり(五)
散るか」まさきの(七)かづらきの山。(七)(新古今)
霞ふる(五)交野のゝ(七)かり衣(五)

あなかま」まだれ(七)鳥もこを立て。(七)(同)

いく庭にもさるゝあり。

飛鳥井に(五)やどりはすべし」(七)かげもよし」(五)

みもひもさむし」(七)ゑまくさもよし」。(七)(催馬樂)

日もくれぬ」(五)人もかへりぬ」(七)山里は(五)

峰の嵐れ音(七)むかりして」。(七)(後拾遺)

年もよし」(五)こがひもえたり」(七)大國れ(五)

里たろもしく(七)おもほゆるかな」。(七)(拾遺)

長歌　長歌に二種あり。五。七。五。七」。をいくつも續けて。終ふ五。七。七。とをゞむるを正体とす。これに五。七ざとふさるゝふにあらざれども。句の勢。五。七を離れて七。五と

いふ續きゐあらぬやうに心をべし。すなはち。

なまよみの(五)甲斐の國。(七)うちよする(五)駿河の國と。(七)こちゝの(五)國のみなかゆ。(七)いでたてる(五)富士の高嶺に。(七)天雲も(五)いゆきはゞかり。(七)飛ぶ鳥も(五)とびものぞらず。(七)燃ゆる火を(五)雪もてけち。(七)ふる雪を(五)火もて消ちつゝ。(七)いひも得ず(五)なづけも知らず。(七)あやしくを(五)います神かも。(七)せの海と(五)名づけてあるを。(七)その山の(五)つゝめる海ぞ。(七)富士河と(五)人の渡るを。(七)その山の(五)水のたぎちぞ。(七)日の本ぢ(五)やまとの國の。(七)しづめとえ(五)いまを神かえ。(七)

貴とも(五)おれる神かも。(七)駿河なる(七)富士の高嶺い(七)見れどあかぬかも。(七)(万葉)

みもろの(五)神なび山に。(七)五百枝さし(五)ま〻に おひたる。(七)つがの木の(五)いやつぎ〳〵ふ。(七)玉かづら(五)たゆる事なく。(七)ありつゝも(五)やまを かよはん。(七)あすかの(五)ふるきみやこは。(七)山高み(五)川とほしろし。(七)春の日い(五)山しゝがほし。(七)秋の夜い(五)かはまさやけし。(七)朝雲よ(五)たづいみゞれ。(七)夕霧に(五)蛙いさわぐ。(七)見るごとに(五)ねのみしなかゆ(七)いにしへおもへば。

(七)(同)

五におこりて七。五。七。五と續け。終りを七。七にてとむるを變体とを。これい賤しげまてこのましからぬ体なり。すなわち。

七條の后うせ給ひふける後よよみける。

おきつ波(五)あれのみまさる(七)宮のうちい。(五)年へてをみし(七)伊勢のあまも。(五)舟流したる(七)おこちして。(五)よらん方なく(七)悲しきよ。(五)涙のいろの(七)くれなゐい。(五)われらがなかの(七)まぐれまて。(五)秋の紅葉と(七)人々い。(五)おのがちり〳〵(七)別れなば。(五)たのむかげなく(七)なりはて、。(五)

とまるものとは(七)花をゝき。(五)君おき庭に(七)むれたちて。(五)空をまねかば(七)初雁の。(五)おきわたりつゝ(七)よそふこそみめ。(七)

旋頭歌　旋頭歌い五七七。五七七。と三十八音ゐ續くるものなり。

君がさを(五)三笠の山の(七)もゝち葉の色。(七)神無月(五)時雨の雨の(七)そむるなりけり。(七)(古今)

ます鏡(五)そこなる影ゐ(七)むかひゐて見る。(七)時ふこそ(五)知らぬ翁ゐ(七)あふこゝちすれ。(七)(拾遺)

今様　今様い七五。七五。と續くるものをいふ。句の數い。七五を四つ又い六つ重ねたるを本とすれど。いましへい謡ふべき曲おりしかむ。此うぎりあるおり。今いいかほど續けても妨おし。

花たちばなも(七)ゐほふおり(五)軒のあやめも(七)かをるなり。(五)夕ぐれざまの(七)五月雨ゐ(五)山ほとゝぎす(七)名のりして。(五)(拾玉)

冬の夜寒の(七)あさぎらけ(五)ちぎりし山路ま(七)雪ふかし。(五)心のあとい(七)つかねども(五)思ひやるこそ(七)あいれれ。(七)(同)

歌曲　歌曲はすべて樂曲唱歌としてうたふべきものをさを。句法は定まりなけれど。長歌又は今樣の格によるべし。されどこれは文字たらずとも節ふて延べてうたひ。文字あまればつめてうたふ事出來れば。長短句を用ふる事常ふ多し。

名ばかりは。在原寺の。跡ふりて。松も老いたる。塚の草。是こそそれよ。おきあとは。一村すゝきの。穂は出づるは。いつの名殘。あるらん。草茫々として。露深々と。古塚の。真なるかな。いふしへの。跡おつかしき。氣色かな。（謠）

里ばなれ。須磨の家居の。習ひとて。何事を。まつの柱や。竹あめる垣は。ひとへまて。風もたまらじ。いたはしや。海はすこし。遠けれども。波たゞふゝもとは。聞えきて。いつのまふ。夢をも御覽。候ふべき。よし〳〵それも。御びはを。ねられぬまゝふ。遊むせや。われらも聽聞。申すべし。我も聽聞申さん。（同）

一門の。船のうちふ。かたをおらべ。ひざをくみて。所せく。すむ月の。景清は。誰よりも。御座舟はおくて。かおふまじ。一類其以下。武略さま〳〵は。おほけれど。名を取り揖の。舟ふのせ。主從隔。おかりしは。さ

もうらやまれ。たりし身の。麒麟も。老いぬれば。駑馬まおとるが。ごとくあり。(同)

字あまり字足らず

字あまりとい。定まれる音の數ゴこゆるをいふ。これゴ二つあり。

其一　句の間(頭と末との外)ゴあいうおの字ある時い。これを用ふ。すあいち。

弓といへむ(六)品おきものをあづさ弓
真弓槻弓しおてをあるらし(八)(神樂歌)

ほの〳〵とありけの月の(八)月影ゴ
紅葉ふきおろす(八)山おろしの風。(八)(新古今)

年のうちゴ(六)春いきゴけり一とせを
こぞとやいはん今年とやいはん。(八)(古今)

岩のうへゐ(六)旅ねをれむいとさむし
こけの衣をわれゴかさおん。(後撰)

其二　前と同じき時。わざ〳〵助詞の類を入れても用ふ。をあいち。

植ゑしうゑむ(六)秋なき時や咲かざらん
花こそちらぬ根さへ枯れめや。(古今)

ほの〳〵と明石の浦の朝霧ゐ

島がくれゐく舟をしぞおもふ。(八)(同)

秋の田のかり穂のいほの苫をあらみ(六)

わが衣手ゐ露ゐぬれつゝ。(後拾遺)

右の例ゐはづれたるも古歌ゐあれど。それゐその人の力ゐよりて用ふるあれば。初學の人ゐまねぶべからず。

字足らずとい。定まれる音の數よりすくなきをいふ。これゐ短歌ゐ用ふべからず。をゐち。

やまとの(四)一もとをゝき。(七)古事記)

空みつ(四)大和の國ゐ。(七)(万葉)

うねひの(四)このみづ山ゐ。(七)(同)

きけば(三)ねのみしなかゆ(七)かたれば(四)心ぞいたき。(七)(同)

裝詞

常れいひかたを離れて。詞と音調とのかざりゐ用ふる詞を裝詞といふ。之を返詞。兼詞。いひかけ。緣語。序句。枕詞の六つゐ分つ。

これゐすべて自然なるを尊ぶ。もとめて工ならん事ゐ忌むべきなり。

返詞　返詞とい。同じやうの句調を。詞をかへてくりかへし重ぬるをいふ。これゐ二つあり。いづれも短歌ゐ用ひぬ

あり。

其一　初と中との句にあるもの。こゝを對句といふ。

岩はしの近江の國の
　さゝ波の大津の宮は
天の下ゑろしめしけん
　をめ鳥ぎの神のまことの
大宮ゐてゝとゝきけども
　大殿ゐてゝといへども
春草のゑげくおひたる
　霞たつ春日のきれる
もゝしきの大宮どころ
　見ればかなしも。（万葉）
をゝしきの大宮人ゐ
　舟なべて朝川わたり
　舟ぎほひ夕川わたる。（同）
おき見ればしき波たち
　へみれば白波さわぐ。（同）
あすかのふるき都ゐ
　山高みかはとほゑろし
春の日ゐ山しみがほし
　秋れ夜ゐ川しさやけし
朝雲にたゞゐみだれ

夕雲にかはづいさわぐ。(万葉)

其二　未れ句にあるもの。これをむたゞ返しせいふ。

みあそつくる石の響い天ゐたり
地をへゆすれ父母がためま
もろ人がためゐ。(佛足石歌)

我かどろ板井のゑみづ里遠み
人しくまねば水さびまけり
みくさねにけり。(神樂歌)

老人とみえつるが。しほぐもりにかきまぎれて。あとも見えぬなりまけり。あとをも見せぬおりまけり。(語)

兼詞　兼詞といい一つ詞ゐ二つの意をもたるをいふ。をかいち。

かれる田ゐおふるひづちの穂ま出でぬい
世を今さらゐあき(飽、秋)はてぬとか。(古今)

花の色いうつりまけりをいたづらゐ
我身よにふるながめ(眺、長雨)せしまゐ。(同)

君がゆく越の白山ゑらねども
ゆき(行、雪)のまに〳〵あとい尋ねん。(同)

けふ別れあをいあふみ(逢身、近江)とおもへども
夜やふけぬらん袖の露けき。(同)

別れぢいてれやかぎりの旅ゐらん

さらにいく(往、生)べきこゝちこそせね。(新古今)

雲のうへも涙にくもる秋の月

いかでをむ(澄、住)らん淺茅生のやど。(源氏)

都をば霞とともにたち(人のと霞のと)しかど

あきかぜぞ吹く白川の關。(後拾遺)

いひかけ　いひかけとは。兼詞を間に置きて上下の用をつとめしむるをいふ。すなわち。

但し。上より受けたる詞を全くいひをはらずして。下ふつゞくる事も多し。

世の中をそむきにとていこしかども

猶うき事いおほ(多、大)原のさと。(新古今)

難波津をけふこそみつ(見、御津)の浦毎ゐ

これや此世をうみ(倦、海)わたる舟。(後撰)

みよし野い山もかすみこてしらゆきの

ふり(降、舊)よし里ゐ春いきゐけり。(新古今)

君をのみ思ひこし(来、越)ぢのしら山は

いつかはゆきの消ゆき時ある。(古今)

緣語　緣語とは。句中の詞に緣ある兼詞を用ふるをいふ。すなわち。

逢坂の關のしみづゐかげ見えて

いまやひくらん望月の駒。(拾遺)

これい望月(甲斐の地名)といふ詞の緣ゐ。影見えての

句をおけるなり。

見るまゝに露ぞこぼるゝおくれゐし

こゝろも知らぬ撫子の花。（後拾遺）

これは一條院のうせさせ給ひし頃。後一條院のをさなくおはしましして。おでしこの花を何心もなくてとらせ給ひけるを。上東門院のよませ給ひしかれば。撫子をやがて後一條院の御事ゆよみなし給へるなり。されば花の縁ゆよりて。涙を露とし給へるなり。

おくと見し露もありけりはかなくて

きえゆくし人を何ゆたとへん。（新古今）

これは小式部内侍の常に着たりける露の摸様の唐衣を。おくなりて後。上東門院より尋ね給ひしかば。母の和泉式部がそれゆそへて奉れる歌なり。されば露の縁にきえにしとゝいへるなり。

序句　序句とは。下にいゆべき詞の餘情餘音あらせんとて。まづ設けたる句を冠らするをいゆ。これに三つあり。

其一　物によそゆる。

散る花にせきとめらるゝ山川の（如ク）

ふかくも春のありけるかな。（詞花）

櫻咲く遠山鳥のしだり尾の（如ク）

ながゝし日もあかぬ色かな。（新古今）

芦鴨の羽風になびくうき草の（如ク）

定めなき世をたれかたのまん。(同)
うちがるゝ淺茅が原れ刈萱の(如ク)
みだれて物を思ふころかな。(同)
思ひ出づるをりたく柴の夕煙(ノ如ク)
むせぶもうれしわすれがたみに。(同)
あらし吹く峰れ紅葉の(如ク)日にそへて
もゐくゐりゆく我おみだかな。(新古今)

其二　特更にいひかくる。

むをぶ手ろ雫に濁る山の井弦
あか(閼伽、餓)でも人に別れぬるかな。(古今)
梓ろおしてはる(張、春)さめけふ降りぬ

あすさへふらむ若菜つみてん。(同)
白露のあしたゆふべにおく(置、奥)山の
苔のこゐゑい風もさはらぢ。(新古今)
歸りけんほど思ふにもたけぐまの
まつ(松、待)我身てそいたく老いぬれ。(同)
立ち別れいな(往、稲)むの山の峰におふる
まつとし聞かむ今かへりこん。(古今)
見し人い世にもかぎさ(無、渚)のもしほ草
かき置くたびに袖ぞをるゝ。(新古今)
風さむミ伊勢の濱荻わけゆけむ
こゐをかり(借、雁)がね波におくなり。(同)

其三　同音の詞を重ぬる。

ゆづまぢやさやの中山さやかにも
見えぬ雲井ゆ世をやつくらん。（新古今）

青柳の糸に玉ぬくしらつゆの
しらたいく世の春かへぬらん。（同）

いづくにもすまれずゆ只をまであらん
柴の菴のしむしおる世に。（同）

枕詞　枕詞とい。短歌長歌の五字の句ま置きて。次の句の名詞ゆ動詞かま續くる詞をいふ。

これいもと序句おれども。古よりあまたの人の用ひおれて。定格とおれる詞をさすおり。されむ序句の新ま設くべき種類と區別して心得べし。

これも序句の如く三種あり。

其一　物まよそふる。

菅の根の……あがき
春鳥の……さまよふ
苅菰の……みだるゝ
うむ玉の……くゆき

其二　特更ゆいひかくる。

梓弓……はる（張、春）
大君の……三笠（御笠）の山
石の上……ふるき（布留、古）

海人小舟……はつせ（泊、初瀬）
玉鬘……掛くる
呉竹の……よ（節、世また夜）
同……ふし
水鳥の……かも（鴨、加茂）
飛ぶ鳥の……あすか（鵤、飛鳥）
はる日の……かすが（霞、春日）

其三　同音の詞を重ぬる。

ちゝの實の……父
はゝそ葉の……母
淺茅原……つむら

この外ゐ形容詞。形容動詞より来りて定格となれるものあり。

やすみしゝ……大君
もゝしきの……大宮
草まくら……旅
岩はしる……瀧
蘆がちる……難波

枕詞はいかゐる意より用ひいでたるか。知られぬもの多し。それらは只その詞の枕詞そのみ見てあるべし。用ひられたる枕詞は。名詞として用ふるものあり。すなはち。

あらちめいかゝれとてしもうむ玉の
わが黒髪をなでむやありけん。（後撰）

これは母のかはりまで。其枕詞たちちめを用ひたり。

もゝしきや古き軒端のしのぶまも
かほあまりある昔なりけり。（新後撰）

これは大宮のかたりふ。其枕詞もゝしきを用ひたり。

問題

一　歌の種類をあげて説明せよ。

二　いかなる時字あまりを許すべきぞ。

三　返し詞の例を他のものよりあげよ。

四　無詞の例を他のものよりあげよ。

五　いひかけの例を他のものよりあげよ。

六　縁語の例を他のものよりあげよ。

七　序句の例を他のものよりあげよ。

八　枕詞と序句との差別をしめせ。

和文典下卷終

明治廿四年四月十三日印刷　版權所有
仝　年四月十六日出版　正價金六拾錢

著者　東京市小石川區表町五十三番地　大和田建樹

發行兼印刷者　東京市日本橋區通塩町八番地　宮川保全

發行所　東京市日本橋區通塩町八番地　中央堂書店